

令和7年度自己評価計画

重点目標		具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実施状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
1	生徒指導の方針・基準に一貫性を持ち、時代の変化に適応しつつも毅然とした指導で、基本的な生活習慣の確立と規範意識の高揚を図る。	① 挨拶や所作、マナーの指導を、ＳＴ・集会・学校行事・生徒課での指導等で行う。さらに、「遅刻ゼロ・鶴高挨拶運動」で指導する。	生徒課生徒指導 各学年	前年度の最終調査において、自らすすんでよく挨拶している生徒の割合は84.6％と前年度を下回った結果であり、改善策が必要である。これまでの「遅刻ゼロ・挨拶運動」を活かしつつ、生徒会執行部や風紀委員と連携し運動の拡充に取り組み、学校全体で安心して積極的な挨拶を交わすことができる雰囲気づくりを目指していく。また、年間を通じて学校・学年行事、集会等の様々な機会を捉え、挨拶が良好な人間関係の基礎となり、学校生活の充実感や個々の目標達成にも繋がっていくこと等、挨拶の意義や効用を丁寧に指導し、生徒の意識改革を図ることを目指す。	【成果指標】 来校者・教職員、地域の方、友人・クラスメートに明るく元気な声で挨拶・お辞儀等ができる。	学校に関係する方々にはもちろん、生徒間の挨拶ができる生徒の割合が、 A 90％以上 B 85％以上90％未満 C 80％以上85％未満 D 80％未満	ポイントが5割以上下がったり、D判定の場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)
		② 日常の観察の中で生徒の状況とそれに対する指導方針を共有し、全教職員が積極的に指導にあたる。	生徒課生徒指導 全教職員	服装容儀や規範意識の向上に向けて教員の積極的な声かけは重要であり、昨年度の87.5％という数値は、多くの教員が意識している一方で、まだ改善の余地があるものと判断できる。生徒一人一人の状況や指導方針を共有し、先生方全員が指導しやすい環境づくりのアプローチが求められる。職員連絡会や校内研修、職員会議時をとおして、具体的な声かけの例や生徒への効果的な伝え方、指導のポイント等、共通理解を深める機会を継続して設けることで先生方の意識統一と実践に繋げていく。 周囲に不快感を与えない制服の着こなしや頭髪等の身だしなみについては生徒が社会性を身につける上でも大切な要素であることから、日常的な声かけと指導を通して、生徒の規範意識の培っていく。	【努力指標】 積極的に生徒への声かけを教員が協力して行っている。	服装容儀等について積極的に声かけをしている教職員が、 A 90％以上 B 85％以上90％未満 C 80％以上85％未満 D 80％未満	ポイントが5割以上下がったり、D判定の場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (教職員アンケート)
		③ 学校生活の重要性を伝えながら、学校生活全般が充実感をもって過ごせるような個々の指導に努める。1日のよいスタートをされるように、5分前登校の重要性を粘り強く指導していく。	生徒課生徒指導 教務課 保健厚生課 各学年	前年度は年度内で3回以上遅刻した生徒が74名にまで増加したことは、大変気がかりな状況である。反省文による指導に加え、個々の原因に寄り添った丁寧な対応が不可欠である。遅刻者に対して反省文をとおして繰り返さない決意や改善策を考える指導を行っているが、遅刻の背景は様々な要因が考えられる。体調管理や睡眠・食事の生活習慣、スマートフォン等の使用状況、生活リズムの乱れ等、生徒一人一人によって課題は異なっている。そのために、一人一人とじっくりと話し合い、生徒自身の言葉で遅刻の原因や背景にある事情を語ってもらうことが改善への第一歩となる。生徒の意見を丁寧に聞き出すことで、生徒自身が納得し、主体的に改善に取り組む意欲を引き出せるように努めていく。 さらに、担任・学年団・部活動顧問とも連携を強化し、粘り強くかつ丁寧な指導を展開していく。各教員が持つ情報を共有し、連携を取りながら粘り強く指導し、多角的な視点から生徒を支える体制を築くことを目指す。	【成果指標】 遅刻指導を通して生活が改善し、3回以上遅刻を繰り返さないようにする。	年度内で3回以上遅刻した生徒の数が、 A 50人未満 B 50人以上55人未満 C 55人以上60人未満 D 60人以上	Dの場合、指導の方法を再検討する。	月ごとの集計記録を整理して、前年度の年間総合計に基づいて評価する。
		④ 「いじめ・不登校問題対策委員会」等で生徒情報を共有し、全職員が連携して「いじめ」が根絶されるよう努力する。	生徒課生徒指導 保健厚生課 全教職員	前年度は、いじめがなく安心できる学校であると感じている生徒は全体で85.5％と前年度より3ポイントほど向上した。日頃より、前掲①～③の取組を徹底するとともに、教員間で「絶対にいじめを許さない学校」であることへの断固とした強い意識づけを共有していく。予測的見地への具体的情報発信・命の尊厳・危機管理意識を共有し、自他ともに思いやる心の醸成に努めている。また、前年度同様、Googleフォームを活用した相談窓口を常時開設するとともに、学期半ばの面談週間の日課変更で面談時間を増加させることで、いじめの予兆把握や早期発見等、積極的認知に務め、生徒たちが安心して声を上げられる環境づくりを拡充していく。さらに、ネットトラブルやいじめを未然に防ぐための教室での振り返りや講話を充実させ、生徒の主体的な学びを促し、いじめの抑止に繋げていく。いじめの予兆を早期に把握し、積極的に認知していく姿勢は、何よりも生徒の安心感に繋がることから、今後もこれらの取組を継続し、さらに深化させていくことで、全ての生徒がより一層安心して学校生活を送れるようにする。	【満足度指標】 「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が高い。	「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が、 A 90％以上 B 85％以上90％未満 C 80％以上85％未満 D 80％未満	Dの場合、指導の方法を再検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)
		⑤ 学校の環境美化に積極的に努め、校舎内外の環境美化にも取り組むよう指導する。	保健厚生課 生徒課特活 全教職員	前年度の生徒アンケートで、校舎内外の環境美化に積極的に取り組んでいると回答した生徒は、昨年同期とほぼ同値の77.2％となった。 本年度は教室はもとより、校舎内外の環境美化意識をさらに高め定着させるため、整備委員による定期的な「クリーン作戦」の実施や校内放送・ポスターの掲示等の、生徒が主体的に美化活動に参加することで、自分たちの学習環境を大切にすることが育まれ、より快適な学校生活を送ることに繋がっていく。	【成果指標】 校舎内外の環境美化にも積極的に取り組む。	校舎内外の環境美化にも取り組んでいる生徒の割合が、 A 85％以上 B 80％以上85％未満 C 75％以上80％未満 D 75％未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実施状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
2 生徒が安心して学べる授業づくり（授業規律の維持、授業のユニバーサルデザイン化）を推進するとともに、家庭学習時間の確保や読書量の増加を図り、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。	① 毎月の教育相談委員会で報告される生徒情報を、学年会で共有し、より深く把握できるようにする。担任が掴んだ生徒の進路希望を教科会でも共有し、適切に支援できる能力の向上を目指す。	教務課 各教科 教育相談課	様々な課題を抱える生徒への的確なサポートのためには、綿密な情報共有が不可欠である。生徒一人一人の学習状況、家庭環境、そして特別な配慮を要する事項などを整理し、関係者間で共有し、適切な学習指導を行っていく必要がある。懇談会等得られた貴重な情報を、担任、学年団、教育相談、部活動の顧問、教科担当者が共有し共通理解を持つことは、生徒理解を深める上で欠かせない。さらに、必要に応じて外部機関との連携も視野に入れることで、より専門的な支援を提供できる可能性も広がっていく。多角的な情報を共有し、それぞれの専門性を活かしながら連携していくことで、生徒一人一人のニーズに合わせたきめ細やかなサポート体制を構築し、生徒が安心して学び、成長できる環境を整えていく。	【努力指標】 教職員は個々の生徒理解に努めた上で、学習指導を行う。	個々や集団に応じた授業を行うために、担任や学年団・教育相談等と生徒情報を相互に共有している教職員の割合が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (教職員アンケート)
	② 1人1台端末の効果的な利用や話し合い、発表の場面等を取り入れ、生徒が主体的に学習に取り組む力を身に付ける。また、そのための学習の評価の仕方を各教科で検討する。	教務課 各教科	授業中は落ち着いているものの、受け身である生徒が少なくなく、理解したことや習得したことを活用したり探究したりする力はまだまだ乏しい。個々の教科でなく学校全体で、生徒の探究活動のスキルを身に付けることや、ICT機器の活用や協働学習を通して授業への主体的参加を促す指導体制を整備していく必要がある。また、日常的に対話的な活動において、自己の考えや気持ちを意欲的に伝えるために、自己の考えを整理したり意見交換したりする表現スキルや、互いに共有するための合意形成のスキルを鍛えていく手立てが必要である。	【満足度指標】 習熟度別や選択授業、1人1台端末を利用した学習や評価を検討し、生徒の学習活動に対して効果的に実施されている。	発表や話し合い活動等、積極的に授業に参加したと答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)
	③ 個に応じた進路指導、就職指導を充実させることにより、自尊感情を育み、希望進路の実現を果たせるよう努力させる。	進路指導課 3年学年会 各教科	前年度は3名の国公立志望者のうち2名が合格した。今年度は9名の国公立大学志望者がおり、全員に合格圏内の力をつけさせ5名以上の合格を目指す。そのためには進路指導課と学年・教科がより緊密に連携し、個々の生徒の特性と学力の把握を行い、個々に応じた指導を展開していく。 就職に関しては、前年度同様の売り手市場が予想されるため、本人の適性を最重視し、同一企業で長期間働くことができるよう、保護者や関係諸機関との連携を密にし、就職希望者の適性診断を随時実施していく。	【成果指標】 国公立大学に合格する。	年度末の進学状況において、国公立大学合格者が、 A 5名以上 B 3名以上5名未満 C 1名以上3名未満 D 0名	Dの場合、目標設定の検討、指導方法等を検討する。	最終進学状況の調査で評価する。
				【成果指標】 就職希望者が3月末までに100%内定している。	3月末の就職状況において、学校推薦での就職内定率が、 A 100% B 95%以上100%未満 C 90%以上95%未満 D 90%未満	Dの場合、目標設定の検討、指導方法等を検討する。	3月就職状況の調査で評価する。
	④ 家庭学習調査を行い、その状況を分析し、課題の出し方を適切に工夫したり、担任が面談したりすることで家庭学習の習慣を身に付けさせることにつなげる。	教務課 進路指導課 各学年	家庭学習の必要性を自覚し、取り組むことができる生徒は約半数に留まっており、未だ定着しているとは言えない。生徒の習熟度に合わせた課題を与え、生徒が学ぶ喜びを感じつつ取り組む姿勢を身に付けさせなければならない。しかしながら、限られた人員の中で応じた課題設定は難しいため、ICTツールを活用していく必要がある。家庭での学習時間や課題の進捗状況の把握することで生徒の自己管理能力を高めるとともに、学習の記録や成果物をデジタルポートフォリオとして蓄積し自身の成長を可視化することで学習意欲の向上を図る等、ICTの力を借りながら個に応じた学習を進めていく。	【満足度指標】 担任・教科担当・部顧問と連携し、学習と部活動の両立を実践させる。	家庭学習の時間を確保している生徒の割合が、 A 60%以上 B 50%以上60%未満 C 40%以上50%未満 D 40%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)
	⑤ 情報科、商業科における各種検定・資格取得を推進するとともに、より上級資格取得に向け挑戦する意識付けと対策講座等、指導体制の充実を図る。	情報科 商業科	前年度の全商各種検定取得状況を合格者数では、ビジネス計算1級5名、2級23名、3級40名、ビジネス文書1級6名、2級28名、3級36名、情報処理1級2名、2級26名、3級41名、商業経済1級5名2級26名。また、学年別の割合は、3年生ビジネス計算1級31.3%、2級87.5%、3級100%、ビジネス文書1級37.5%、2級87.5%、3級93.8%、情報処理1級12.5%、2級81.3%、3級100%、商業経済1級31.3%2級50.0%。2年生ビジネス計算2級29.0%、3級77.4%、ビジネス文書2級45.2%、3級67.7%、情報処理2級41.9%、3級80.6%、商業経済2級60.0%。3級を2種目以上取得した割合は、3年生16名、2年生25名(89.1%)、2級を2種目以上取得した割合は、3年生15名、2年生15名(65.2%)であった。 各種資格に関する興味・関心を早い段階で引き出すために、進学就職への見通しを掴ませるとともに、合格した達成感を得させることや個別指導を拡充することで、より上級資格取得に対する強い意欲を持たせるよう指導の充実を図っていく。	【成果指標】 各種検定資格の取得率が増加している。	ビジネスコースに在籍する生徒を対象に、各種検定各級取得率が、 A 1級2種目取得率30%以上 B 2級2種目取得率50%以上 C 3級2種目取得率70%以上 D A B C未満 ※各検定級合格者数／コース人数	Dの場合、結果を分析し、学習意欲喚起の方策、指導体制等、改善策を検討する。	各種検定の合格状況を調査する。
	⑥ 学校図書室の取り組みを活性化し、積極的に読書に取り組ませる。朝学習や授業を利用して読書を取り入れ、本に触れる機会として図書館での貸し出しを促す。	教務課（図書担当）	前年度より増加しているものの、学年やクラスに偏りがある等、まだまだ少ない現状がある。クラス別では、特進クラスやスポーツ科学コースで少なく、貸出数推移では4月～6月度で特に少ない。国語の授業等のガイダンスで1学期からの貸出を促すとともに、授業や朝学習、部活動等において、具体的にどのような本があるか実際に手に取ってみたい、興味のある本を見つけさせる等、活字に触れる機会を増やす手立てが必要がある。	【成果指標】 ガイダンスでの本の発見や、教科のみならず、朝読書等を通して、本に触れる機会が促がされ、読書量が増加している。	図書室での年間貸出冊数が、 A 1,400冊以上 B 1,200冊以上1,400冊未満 C 1,000冊以上1,200冊未満 D 1,000冊未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	年度末に集計する。

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実施状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
3 教育活動の速やかな情報発信と地域社会と連携・協働した活動の推進で、地域や保護者から信頼される学校づくりに努める。	① 中学生やその保護者に対して従来のホームページに加え、新たにSNSアカウントを設置・運営し、学校行事や部活動の大会情報、日常の学校生活等をよりタイムリーに公開することで、本校への理解を深め志願者の増加をめざす。	総務課	ホームページへのアクセス数は月平均で前年度59%減の12,509件であった。令和4年～5年が多かったという実態はあるものの、大幅な減少を改善する必要がある。閲覧者が求める情報をより分かりやすく、魅力的に提供するために各コンテンツの質的向上を図ること、新しい情報を積極的に取り入れリピーターを増やすために更新頻度を増加させること、3年前から取り組んでいるInstagramとの連携を図りホームページへの誘導をより強化することが求められる。 Instagramでは、学校生活の雰囲気がいり分かるよう、画像や動画が多く用いられり生徒たちの日常的な学校生活も取り入れたりする等、魅力的な情報発信ができており、ホームページと連携しながらブラッシュアップしていきたい。特に、地域商工会青年部とのタイアップ動画掲載は閲覧数も多く地域住民からも好評であった。これからも、地域と連携した白山手取川ジオパーク推進活動、鶴来街づくり事業等、各種取組について、本校とともに地域の魅力発信を拡充していく。	【成果指標】 本校のSNSアカウント（鶴高Instagram）の「グッド」数が、平均で A 180件以上 B 150件以上180件未満 C 120件以上150件未満 D 120件未満	SNSアカウント（鶴高Instagram）の「グッド」数が、平均で A 180件以上 B 150件以上180件未満 C 120件以上150件未満 D 120件未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に集計する。
	② 「総合的な探究の時間」の活動を通して、生徒が興味・関心を持つ分野の課題に気づき、その問題の本質を考え、解決方法の検討等に取り組む学習活動を充実させていく。	進路指導課	生徒が探究型学習の形で、興味関心を持つ分野や地域課題の解決をテーマに取り組む機会を大幅に増やす。1年生においては、探究スキルをしっかり学び、探究型学習の手法に慣れるための機会を設ける。2・3年生においては、どのような課題があるのか、課題の背景や取組を理解し、解が一つでないことを知り、各自がそれらに対してどのように関わって地域や社会、環境等に貢献をしていくのか、そして、話し合いや発表等、意見交換を通して多様な視点から考察力や表現力、協働する力を向上させることを目指した取組を推進していく。	【努力指標】 生徒が活動に、主体定・協働的に参加している。	「総合的な探究の時間」の活動において、積極的に取り組むことができた生徒・教職員の割合が、 A 80%以上 B 70%以上80%未満 C 60%以上70%未満 D 60%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （生徒・教職員・保護者アンケート）
	③ 生徒・教職員が一体となり、手取川歩行や花いっぱい運動を通して、地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組み、地域とのつながりを深めていく。	生徒課特活 総務課	前年度は全学年での減少が見られた。特に2年生については10%以上の減少であった。主な活動としては、5月には商業部が加賀市で被災者ボランティア活動、10月には生徒会が校内で赤い羽募金活動、11月にはビジネスコースで一六市での販売ボランティア活動、柔道部の白山青年の家野外ボランティア活動、各部活動での近隣中学校との合同練習等も行われている。 一部の部活動の取組だけでは、生徒全体にボランティア活動の意義が伝わりにくく、取り組んだ成果を鶴翔祭で発表する等、活動の意義を生徒全体に浸透させる工夫が求められる。また、活動の魅力や達成感をより多くの生徒に伝えるため、より幅広い企画や働きかけも必要で、スポーツや文化的行事を通じた地域連携の取組を充実させていく。	【努力指標】 生徒・教職員が積極的に小中学校や地域と連携する活動に参加している。	学校行事や課外活動において、地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組むことができたと思う生徒・教職員の割合が、 A 70%以上 B 60%以上70%未満 C 50%以上60%未満 D 50%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 （生徒・教職員・保護者アンケート）

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実施状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
4 教職員自ら、これまでの働き方を見直し、限られた時間の中で、教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保できるようにする。	① 各教職員が自らの勤務時間や業務内容を的確に把握するとともに、毎月の業務の流れの中で先を見通し、区切りを意識した計画的・効率的な遂行に努める。	教頭 全教職員	学習活動や部活動への指導の質の向上を図りつつ、具体的な計画や取り組みを行い、時間外勤務を減少することができたとする職員の割合は前期比6.7%増の78.1%と、堅調な数値となっている。また、80時間超過者は延べ人数15名、実人数は8名と前年同期より延べ人数で2名の増加、実人数で増減なしとなった。月別推移では、減少した月は4月、5月、12月で、増加した月は6月、7月、9月、10月となっている。さらに、45時間以下の職員の割合は75.0%と前年同期比6.6%の増加となっており、全体として堅調に改善に向かっている。 学期始めや部活動の大会期間等の時期では依然として超過勤務状態にあるが、月80時間以上超過勤務ゼロ、月45時間以下の増加を実現するために、職員会議日に加え中間考査後の面談週間における短縮日課の設定、定時退校日の割振りによる確実な遂行、部活動の計画的な運営等、業務整理による残業削減を図っていく等、より堅実な遂行に努めていく。	【努力指標】 教職員一人一人が自らの勤務時間を把握し、業務内容を精査して計画的・効率的に取り組み、時間外勤務が削減されている。	学習活動や部活動への指導の質の向上を図りつつ具体的な計画や取組を行い、時間外勤務を減少することができた教職員の割合が、 A 85%以上 B 75%以上85%未満 C 65%以上75%未満 D 65%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (教職員アンケート)